

## 教育委員からのメッセージ

### 第1グループ

小田原 榮 委員長

メッセージ『未来へ向かう力』

「繋ごう日本の力 がんばろう日本」(2012.10.31 札幌ドーム球場フェンス標語)  
過去・現在・未来へと向かう時間的な繋がりとともに、この標語は日本のどこの場所であっても、という空間的な繋がりも含んでいるように思われます。「つながり」については、別のグループのタイトルとなっていますのでそちらに譲りますが、基本的には日本のどんな力を繋げて行くか、また、どんなことを頑張るのか、考えなければなりません。とすると余りに広すぎますので、具体的に次の三つの力を提示致します。

『三つの本』(臼井吉見 筑摩書房『臼井吉見集』第四巻)

臼井氏が1960年、全連小総会(長野大会)における講演で、『芸者』(増田小夜)・『二十五歳になりました』(佐藤藤三郎)・『ささやかな日本発掘』(青柳瑞穂)の三冊を紹介されたのですが、後に「高校を卒業する皆さんへ」と題して教科書に採録された評論です。これに重ねて、「本物」・「本音」・「本気」の三つの『本』を力として蓄え、実践すること、即ち、「本物に触れる、本物を知る」・「本音を言う、本音で語る」・「本気で取り組む、本気になる」という『本』を基とした行動する力が、今も、そして、これからも必要だと思っております。

「『天を恨まず』ときつぱりと言ひて災害の校舎より巢だちゆきし少年」  
(2012.7.2「読売歌壇」西条市 藤原 あい 岡野弘彦 選)

3・11大震災直後に卒業していった被災地生徒の答辞の姿を詠った歌ですが、「天を恨まず、皆で助け合って、未来を切り開いて行く」と涙ながらの誓いが続いている、その姿が今も浮かんできます。月日は過ぎ去ろうとも、この誓いを忘れず、共有していきたいと思っております。原発の被災を含め、天災だとも、人災だとも言う人がいますが、この誓いの中には、「人を憎まず」も語られていると思われてなりません。根本に「信じる心」が太く、深く貫かれているようです。三陸の「津波てんでんこ」とは、「信頼関係に基づいた『絆』そのものであり、想定に捉われない判断力、知識ではない姿勢だ」と聞いております。その力をどのようにして身に付けるかということも大きな課題となるでしょう。

## 教育委員からのメッセージ

### 第2グループ

川上 剋美 委員

メッセージ『命の大切さ』

人の命は誕生から死までの間あるものなのでしょうか。

人は毎日己の命あることをどのように意識しているのでしょうか。

人の命、動物、生物、植物の命又その他物の命は自然に終わりを迎えます。人、動物、生物には死が、植物は枯れ、物はその役目を終えるという寿命が。

命がなくなると人は悲しみます。御家族、身近な方、つながりの強い方の場合には特別な悲しみとなるでしょう。又、動物の死の場合やその他の場合にも悲しみがあることでしょう。

人は他の命を亡くすことで悲しみ、苦しみますが、その経験は他の命を大切に作る心(愛する心)、他の気持ちを感じる心を育むことになります。そうして育まれた心は己の命・生をより大切にするでしょう。

昨年の東日本大震災では多くの方が命を亡くしました。又、大雨等災害でも同様でした。そのお一人お一人に御家族、御親族、お知り合い、そして日本中の人が悲しみ、苦しみました。

地震・大雨等の自然災害に対して人間は抗えませんが、人間の利益(便利・楽・得 等)を求めての自然破壊はこれ以上許されないのではないのでしょうか。

人間の利益を求めた結果出来あがった価値観は自然の前に、命の前に何の意味があるのでしょうか。現代社会にある俗的な価値観は時として人の心を壊していることも事実のようです。

これからの児童・生徒達に目に見えないものや数字に表れないものや事柄を大切にする、温かくて豊かな、そして強い心が育まれるよう見守り続けることが年長者の役割ではないのでしょうか。

## 教育委員からのメッセージ

### 第3グループ

和田 孝 委員

メッセージ『遅しく社会に生きる子どもたちをはぐくむために(提案)』

- 小・中学校での取り組みに期待すること - 』

東日本大震災（平成23年3月）における被災者の冷静で、整然とした行動や協力的な対応については、国際社会から感嘆の声が上がった。子どもたちも大人に協力し、ボランティア活動に参加し、避難生活を支え、たくましく振舞った。避難所生活の様子を壁新聞にして、人々を和ませ、明日への力を与えた例もあった。

平成23年4月から「小学校学習指導要領」は全面実施された（中学校は24年度から）。その柱は、学力・学習意欲の向上とともに、『豊かな心や健やかな体の育成』がある。その背景には、子どもたちの「自分への自信の欠如や将来への不安、体力の低下」が挙げられている。「子どもたちに他者、社会、自然・環境との関わりの中で、共に生きる自分への自信をもたせること」が趣旨である。

学校は、集団・社会生活を基盤とした教育活動を通して社会性を育成する場であり、日本の学校教育はその役割を重視して行われてきた。教育課程に位置づけられた特別活動（学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事、クラブ活動）は、特に学校生活の中での意義は大きく、友達づくりや規範意識の育成、協働や社会貢献を含め、集団を大切にし、充実感・連帯感を育んできた。一方、不登校児童生徒12万人、いじめ認知件数6万7千件など（平成21年度）の実態は、集団生活への不適応や他者への思いやりの欠如が背景にある。

学校生活を通しての絆（人と人との関わり）の大切さや集団の一員としての体験の充実を地域、保護者と連携・協力して取り組むことが重要である。

- 1 子どもたちが自慢できる、学校が誇れる教育活動を行おう。  
例：全校児童生徒が参加して、地域の方が喜んでくれる活動  
社会の問題を取り上げ（専門性が高く）、よりよい生活に役立つ学習など
- 2 日常の学校生活の中での、人との交流、集団活動を重視しよう。  
例：民主的な話し合いがきちんとできること  
自分の役割を責任をもって行い、お互いが認め合えること など
- 3 年齢を超えた人たち（異年齢の交流）や地域の人々との関わり（地域活動への参加）、社会で活躍している人から学ぶ（本物に触れる機会）など多様な活動を行おう。  
例：社会福祉施設等におけるボランティア活動 など

## 教育委員からのメッセージ

### 第4グループ

金山 滋美 委員

メッセージ『人と人とのつながり』

東日本大震災を経験して、私達は何を学んだのでしょうか。

日本人は、物資を奪い合うどころか、列も乱さず、お互い譲り合って避難所で生活している、と海外メディアでは絶賛されたそうです。その裏には壮絶な現実があったと思いますが、確かに秩序は失われませんでした。社会の中で人と人との関わりが薄くなり、日本人が本来持っていた特性が、なかなか表に現れにくくなっている中での出来事でしたが、それを可能にしたのが学校教育ではないのでしょうか。様々な行事や学級活動を通じて、また授業の中で、友達と協働することで、助け合い譲り合い、相手を思いやることを学んで来たからです。

もう一つは、想定外の大惨事を生き抜く力、「釜石の奇跡」で発揮された、主体的に自ら判断し行動する力が必要だということです。災害時のみならず、生きていくために大きな力となることでしょう。ただこれも自然に備わるものではなく、学校教育の中で育て、家庭・地域と連携することで初めて発揮される力だということもわかりました。本当の「生きる力」を育むために、社会全体で取り組む事は今や急務です。

この「相手を理解し受け入れる力」や「自ら学び考え行動する力」はどうやったら培われるのでしょうか。地域社会だけでも学校だけでも、これを育めないことは明らかです。様々な「大人」の関与が不可欠です。そのために大切だと思うのは地域運営学校です。地域住民が学校教育に参画するという事は、学校が地域の中にある事をお互いに認識し、地域として教育に責任を持つということです。学校と保護者・地域の信頼関係を築き、連携することができます。子ども達に様々な「実」体験をさせることが可能になります。現代は「つながる」ことを意識的に作らなくてはいけないと言えます。

子ども達も「つながり」たいと思っています。けれどもインターネットや携帯・スマートフォンの普及で、そのつながり方が変わっています。また、つながりを持ってない人への配慮も必要です。学校には、人とのコミュニケーションに困難を抱える子ども達が増えていることを忘れてはいけません。この子ども達も含めての「人と人とのつながり」を築ける地域、様々な違いのある人たちを受け入れることのできる成熟した社会を、学校を核として作り、すべての子ども達が夢を持って生き生きとしている、そんな八王子となることを願っています。